OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	萬葉集「玉の緒ばかり」考
Author(s)	
Citation	語文. 1955, 15, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68479
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

萬葉集「玉の緒ばかり」考

秋本吉郎

一

言葉の意味、用法が時代の推移にしたがつて変移するもののあることは更めていふまでもない。それが歌語である場合、時代的に変移した乃至は変移せしめた新しい意味、用法で使用して、その歌の情興を新鮮ならしめる効果のあることもまた明らかである。しかし、歴史のヴェールによつて隔てられた古代の歌語に於いて、ことにそれが意味を明示しない特殊な用法である場合に於いては、その歌語の意味、用法の史的把握を缺いては、その歌が有ち又与へた感興は勿論、歌意をも了解し難い、といふことも自明のことである。さうした歌語の一としてタマノヲをとりあげ、その特殊用法であるタマノヲバカリについて考察しようとするのであるが、平安朝期に於ける意味、用法については別に詳述したので――『平安朝に於ける歌語「玉の緒ばかり」考』（昭和二十七年十月　大阪経大論集第五号）――、ここには万葉集に於けるそれを考察論述する。

万葉集にタマノヲバカリとあるのは次の二首である。

① なかなかに人とあらずは桑子にもならましものを玉之緒許
（巻二、二〇八　寄物陳思）

② さぬらくは多麻之緒婆可里こふらくは富士の高ねの鳴沢のごく
（巻十、二三五、東歌駿河国相聞）

②には一本歌曰としてタマノヲバカリといふ形ではないが、併せ考へるべき類歌が収録せられてある。

②* 逢へらくは多麻能乎思家也こふらくは富士の高ねに降る雪なすも
（巻一四、三三五　一本歌）

（註）三三五には、一本歌の前に或本哥曰として「まかなしみ奴良久波思家良久佐奈良久波伊豆の高ねの鳴沢なすよ」といふ類歌が記されてあるが、これはタマノヲを用ゐてゐず、且つ二三句の訓釈に不明の点があるので、本論考には触れないことにする。

まづ所論を限定焦点化する為に、タマノヲバカリのバカリに就いて考へるに、バカリは程度を意味する語であるが、②*によれば思家也と置き替へ得る詞、シケは及ク*の已然形「ある物に及ぶ、同じになる意の語」（万葉集全註釈）であるから、同程度、如しといふのと同義語、従つてタマノヲバカリは「タマノヲと同程度」「タマノヲの如し」の意と解せられる。万葉集に於けるバカリの他の用例に

就いて見ても、

広瀬川袖つく許浅(バカリ)きをや心深めて吾が思へらむ（一三一　家持）

吾恋は千引の石を七許(バカリ)頸にかけむも神の諸伏（七四三）

の如く、同程度、如しの意のものである。「かくばかり」「しかばかり」の用例も亦同様の意味のものであつて、「その程度だけ」「それだけ」と限定する意に用ゐたものはない。「いかばかり」も限定する意味のものでなく、程度を意味するに止つてゐる。バカリに就いては右の如くで異説をさし挟み得まい。

さて「タマノヲと同程度」「タマノヲの如し」とタマノヲによつて譬喩してゐる①②*②*は共に、その歌の本意である恋愛内容を表現せずにある点が用法上の共通点で、ここに解決の困難が原因するのであるが、①は第五句に独立して用ゐてあり、この詞による譬喩内容が自明のものである故に可能な表現形である。②*②*は富士の鳴沢・富士に降る雪の如しと譬喩した下句と対称的に、上句にタマノヲバカリと譬喩表現し、上句、下句共に譬喩内容を明示せずに上下の対称からおのづからにその意を了解せし得る、とするものである。とすればタマノヲバカリはバカリに問題があるのでなく、タマノヲに問題があることになる。タマノヲの実体及びこの詞の和歌文芸上の使用例の中に於いて、甚だ特殊な意味に譬喩せしめようとするのであるならば、譬喩内容を明示しないでは理解せられ難い。タマノヲの意味を最も常識的に用ゐて理解の可能なのが、この場合の用法であるとせねばならない。

一体、タマノヲは永い生命を有つた歌語であり、その久しい使用期間に於ける用法・意味が平安朝期に大いに変移してゐることは別稿に詳述したところである。タマノヲバカリはそのタマノヲの用法上の一形態でありしかも最も常識的な意味での使用形態であるから万葉集の時代に於けるタマノヲの常識的な意味・用法、といふこの詞の時代的把握を缺いては解釈の正確を期し得ないものであつたのである。

二

ところで、万葉集のタマノヲバカリの歌①②には伊勢物語、古今集にそれ〴〵類歌が収載せられてゐる。

①の類歌——なかなかに恋に死なずは桑子にぞなるべかりけるたまのをばかり（伊勢物語一四段）

②の類歌——あふことはたまのをばかり名の立つは吉野の川の滝つせの如（古今集恋三、読人不知、古今和歌六帖五）

あふことはたまのをばかりおもほえてつらき心の長く見ゆらむ（伊勢物語、三〇段、新勅撰集恋五）

古来注釈研究の特に多い万葉、古今、夥語の歌語として、万葉集のタマノヲバカリの解釈は伊勢物語、古今集のこの詞の解釈と交流しつつ諸種の解釈が与へられて来てゐるのであつて、これを要約すれば二系統の解となる。

その第一解は、タマノヲを「珠玉を緒で貫いた服飾具」とし、その緒を短かいとする理解の上に立つもので、緒の短かさといふ尺度上の（短少）を、時間の短かさ（暫時）、量目の少なさ（僅少）、容積の小ささ（細小）等に転義譬喩したものと解しようとするものである。国語で、わづか、いささかといふ語が、短少、暫時、僅少、細少、些小等に通じて用られる意味上の融通性、不明確さに基いた解釈であるが、更にそれら暫時、僅少等の解の由来する「玉の緒」

の実体を顧みて諸説諸解が提出せられてゐるのである。万葉・勢語・古今を併せての諸説を概括すれば次の如くである。

(イ)(1)僅少の意（仙覚万葉集註釈）　(2)暫時の意（勢語山口抄、八代集抄、万葉集新考、同総釈森本治吉説、等）　(3)暫時または僅少の意（勢語肖聞抄、等）

(ロ)緒の短少から——(4)暫時の意（古今註秘抄、同遠鏡、万葉集略解同古義、同全釈、同大成、大言海、国語大辞典、等）　(5)暫時または僅少の意（勢語愚見抄、万葉集代匠記、真淵古今集講義、等）

(ハ)緒の細弱且つ短少から——(6)僅少の意（古今集遠鏡）

緒の細弱から——(7)心細い意（古今集歌詞）

緒の細小から——(8)暫時の意（勢語通）

(ニ)玉と玉との間から見える線の、短少また僅少から——(9)短少の意（藤井高尚古今集新釈）

玉と玉との間から見える緒の、僅少から——(10)暫時の意（古今集正義、同金子元臣評釈、同窪田空穂評釈）

(ホ)習慣的に短少の形容から——(11)情の浅さの意（折口信夫勢語私記）

次に第二解は、タマノヲを「生命」または「霊魂」とするもので、既に平安朝に見える解（毘沙門堂本古今集註）であるが、近時再び採り上げられてゐる。

(イ)(1)生命の間（ハカリ）から——暫時の意（古今注秘抄、八代集抄所引顕昭説、勢語闕疑抄、万葉集略解、等）

(ロ)(2)珠玉の緒に託して霊魂の意（万葉集全註釈）

(3)霊魂があぶほどのわづかの意（万葉集全註釈）

(ハ)(4)生命の間の意（折口信夫勢語私記）

(5)鎮魂祭の魂宮を結ぶ緒の短少、祝意をこめて長き意（折口信夫説、万葉集総釈）

概観的にはタマノヲバカリを暫時の意に解することが通説の如くでありながら、その解釈の根拠は諸説であり、暫時の意以外の解も亦存して定説とすべきものがない。右の二系統の解はタマノヲが珠玉の緒乃至は生命、霊魂を意味し、或は意味する詞として用ゐられてあつたか、更に珠玉の緒としても、短少のものは或は短少を意味する詞として用ゐられてあつたか、この点を検討することによつて批判せられであらう。同時に私の理解も、この用例検討から導かれる意味以外であつてはならない筈である。

三

さてタマノヲの用例は、古事記に「御頸珠之玉緒母由良邇」と一例見えるが、記紀ではミスマル——美須麻流之珠（記上巻）、八尺瓊之五百箇御統（ミスマル）（神代紀上）——といふ詞の方が用例多く、歌謡の上ではタマノミスマル（記上巻）は見えてあつてもタマノヲは見出し得ない。歌語としてのタマノヲは万葉集にはじめてあらはれ、それ以後引続いて使用の多い詞である。さて万葉集での用例は——当面のタマノヲバカリ①②及び※②を除いて——次の如くである。

(一)タマノヲを実体、珠玉を緒に貫いた服飾具乃至装飾具として用ゐたもの（非恋愛歌）

1、初春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらく多麻能乎

（巻二〇、四五二大伴家持）

(二)珠玉の緒といふ実体として、人事（恋愛）譬喩に用ゐたもの

——実体的譬喩

2、玉緒乎沫緒よりて結べればありて後にもあはずあらめやも

（巻四、七六三　紀女郎）

3、葦の根のねもごろ念ひて結びてし玉緒といはば人解かめやも
（巻七、一三四）

4、世の中は常かくのみか結びてし白玉之緒の絶ゆらく念へば
（巻七、一三二）

5、白玉之緒絶えはまこと然れども其の緒又貫き人もていにけり
（巻六、三八一五）

6、片糸もち貫きたる玉之緒を弱み乱れやしなむ人の知るべく
（巻二、二七九）

7、玉緒を片緒によりて緒を弱み乱るる時に恋ひずあらめやも
（巻二、三〇八）

*真珠は緒絶えしにきと聞きし故にその緒復貫き吾が玉にせむ
（巻六、三八一四）

*…玉こそは緒の絶えぬればくくりつつまたもあふといへ……
（巻二三、三三〇）

*ぬば玉の間あけつつ貫ける緒もくくりよすれば後あふものを
（巻二、二四八）

*照左豆が手に纏きふるす玉もがもその緒は替へて吾が玉にせむ
（巻七、一三六）

（註）＊印四首はタマノヲと語を熟してゐないもの

(三)　珠玉の緒といふ実体として、タマノヲノといふ形で、人事（恋愛）の譬喩として枕詞的修飾句に用ゐたもの――枕詞的譬喩

8、玉緒之間もおかず見まく欲り吾が念ふ妹は家遠くありて
（巻二、二九三）

9、玉緒之くくりよせつつ末つひにゆきは別れず同じ緒にあらむ
（巻二、二九〇）

10、あひ念はずあるらむ児故玉緒の長き春日を念ひくらさく
（巻一〇、一九三六）

11、君にあはず久しくなりぬ玉緒之長き命の惜しけくもなし
（巻三、三〇八二）

12、枉言や人のいひつる玉緒之長くと君はいひてしものを
（巻三、三三四）

13、まそ鏡見しがと念ふ妹にあはぬかも玉緒之絶えたる恋のしげきこのごろ
（巻二、二三六）

14、玉緒之絶えたる恋の乱れには死なまくのみぞ又もあはずして
（巻二、二七九）

15、…新た世に共にあらむと玉緒乃絶えじと妹と結びてし事は果さず
（巻三、四八一）

16、天地の依りあひの極み玉緒之絶えじと念ふ妹あたり見つ
（巻二、二八七）

17、かくしつつありなぐさめて玉緒之絶えて別ればすべなかるべし
（巻二、二八六）

18、生きの緒に念ふは苦し玉緒乃絶えて乱れな知らば知るとも
（巻二、二七八）

19、恋ふること益れる今は玉緒之絶えて乱れて死ぬべく念ほゆ
（巻二、二八三）

20、うち日さす宮路をゆくに吾が裳は破れぬ玉緒之念ひ委れて家にあらましを
（巻七、一二八〇）

21、うち日さす宮道にあひし人妻故に玉緒之念ひ乱れてぬる夜しぞ多き
（巻二、三六五）

22、…恋すれば安からぬものと玉緒之継ぎてはいへど……
（巻三、三五五）

（註）20の念委は、古写本にオモヒミタレテ又はオモヒステテモと訓じ、古義は念乱の誤としてゐるが、佐竹昭広氏の念妄（オモヒミダレ）の誤字説（雑誌万葉、第四号）に従ふべきであらう。

㈣ 其他

23、…たらちねの母の命何しかも時はあらむをまそ鏡見れども飽かず珠緒之惜しき盛りに立つ霧の失せぬる如く
（巻二、九、四三四、大伴家持）

24、玉緒乃徙心哉八十梶かけこぎ出む船に後れて居らむ
（巻三、三三一）

25、玉緒之島意哉年月の行き易はるまで妹にあはざらむ
（巻二、二七九）

（註）24の徙心は古写本にウツシココロ、25の島意はシマココロ、又はタエココロと訓じてゐる。

右によれば、タマノヲの意味の明らかな用例のすべてが珠玉の緒といふ服飾具として用ゐてをり、生命または霊魂の意に用ゐたものがない。訓・義ともに不確かな四の三例を以て、タマノヲに生命または霊魂の意味を認めることは従ひ得ない。

（註）25島意を写意の誤字とし、24徙心（ウツシ）と同例と見て顕心（ウツシ）の意、従つてこれにかかるタマノヲは生命の意のものであるとする解釈が契沖（代匠記初稿本）以来見えてをり、全註釈の「生命のかぎり、ウチ（限界）」にかかる（二七九の釈）とするのも同系の解であるが、契沖は長流の説を引いて「うつし心」は「緒を組むをうつともいふ」そのうつへのかかりとも説き（代匠記、初稿本、精撰本とも）、更に24の徙心を徙麻心（又は徙末心）の脱字とし玉緒ハ括時シムレバ島心トツツク」（精撰本）とも説いてゐる。真淵も「絶えたる緒より新しき緒にうつし貫く」（冠辞考）とし、黒川真頼も「うつつとかかるは美しなり」（古今冠辞考）等、ウツシ心を顕心とせず、従つて之にかかるタマノヲを魂の緒（生命）の意としない諸説がある。23、惜しきにかかるものについても、魂の緒（生命）の惜しき意と解するのが、一般の如くであるが、服部高保は「ひたすらに命の惜しき盛といふにはあらず。玉の緒のをと語を掛けたり」（続冠辞考）といひ、全註釈また「同音に依つてヲの音に冠する」枕詞と解し生命の意とはしてゐないのである。

万葉集の用例を以ていへば、生命を意味する詞としてはイキノヲ（気緒また息緒）といふのがあつて一般的である（いきのをに、十一例。いきのをにして、四例。いきのをにする、一例）。上掲タマノヲを用ゐた歌の中にもイキノヲを併せ用ゐたものがあり（18・22）、タマノヲとイキノヲの意味を明らかに区別してゐる。生命を緒といふことは、古事記（崇神天皇の条、己が緒を弑せむ）に既に見え、「物事ノ長キ続き」をヲといふので（大言海）、動物の尾、山の尾、歳月の歳の緒（万葉集中トシノヲの用例十七、すべて長しにかかる）と同様、息の長き連続「息の緒（イキ）」を以て生命を表はすことは理解し得るが、魂は古代信仰にあつては連続を超越した不滅のものであつた筈であるから、魂の連続「魂の緒（タマ）」といふことは始源的には語を成さない。万葉集に於いて生命を意味するのに息の緒を以てし、タマノヲといつた例を他に一つとして見出さないのは、なほ詞の古い意味、使用を保つてあつたものと解すべきである。

更に万葉集以後の用例よりいへば、タマノヲを以て生命の意と

しまたは生命の意をこめて用ゐることは、平安朝中期になつて確実に検出できることであり、新古今時代まで下るとその用例の過半が生命の意味聯想で用ゐられるやうになつてゐる。思ふに服飾具の時代的変遷により、「珠の緒」の使用が稀少化し、従つてタマノヲといふ歌語に対する物体的観念が稀薄化して、タマノヲ——生命といふ意味。用法が発生発展し得たものと解する。このことについては既に別稿に詳論したところである。

さすれば万葉集のタマノヲの用例二十八の中、仮名書きの三例を除いた二十五例の用字「玉緒」「珠緒の」字義通りに、珠玉を緒に貫いた服飾具の意味のものとして理解すべきである。

次にタマノヲを服飾具の意味のものとしても、タマノヲの長しとかかつた用例はあるが短かしと続いたものがない。このことは全註釈も指摘してゐるが（三三六の釈）、万葉集枕詞解（鹿持雅澄）にもながきのみを挙げ、その解説の中に古今集の用例を以て短かきを説き添へてゐるのである。「玉の緒の——みじかき」は別稿に考証した如く、「玉の緒の——絶えて——短かき」から派生した第二次的用法で、玉の緒が本来的に短かい性質があつての故の用法ではない。その用例も伊勢物語、古今集より溯り得ず、作者の明らかなものでは紀貫之の「玉の緒の短かき心思ひあへず」（古今、雑躰）「玉の緒の絶えて短かき命もて」（後撰恋二）を最古とするのである。故にタマノヲの短かきといふ用法は平安朝になつて発生したものとすべきである。

更に前述の如く、珠玉の緒のヲは長き連続を意味する語であるから、始源的には長きものとしての意味を有つ言語表現であるべく、万葉集はその緒本来の意味を失はずにあるものとせねばならない。折口博士が「玉の緒」を以て本源的には短かく、それが転じて長き意をあらはす詞として用ゐられるやうになつたと説いてをられる（上掲）のは、用例の史的配列を逆にした論である。故に万葉集のタマノヲバカリを短かき意乃至はその転義としての暫時・僅少等の意に解し、または生命・霊魂の意に解する従来の諸解は、万葉集の歌に関する限り、総括して承認し得ないことになる。

四

前項に挙げた万葉集に於けるタマノヲの用例について、タマノヲのかかる詞或はタマノヲと聯関使用してゐる詞を挙げると次の如くである。——（）内のものは聯関使用のものを示す。

（A）珠玉の緒の製作工程に関するもの

(1)縒（よ）る……緒の製作操作……用例数一、
(2)縒りて結ぶ……仝　右……〃　一、
(3)くくりよす……緒と玉の操作……〃　一、
(4)結ぶ……緒の操作……〃　（三）
(5)貫く……緒または玉の操作……〃　（一）
(6)あふ……仝　右……〃　（二）
（註）うつ（長流説）括（し）む（契沖説）、うつす（真淵説）にかかるとするものも右と同類のものである。

（B）珠玉の緒としてある時の状態

(7)長し……全体としての状態……用例数三、
(8)間もおかず……個々の玉の状態……〃　一、
(9)ゆらぐ……全体としての状態……〃　（一）
（註）美（うつく）し（黒川真頼説）にかかるとするもの右と同類のもので

ある。

（C）珠玉の緒としてある緒の性質と、それから結果するところ

(10)弱み乱る……緒の性質と断絶後の玉の状態…用例数二、

(11)絶ゆ……(10)弱みから結果するところ……〃　七、

(12)絶えて乱る……(11)とその結果の玉の状態……〃　二、

(13)乱る(念ひ乱る)…(12)の後半、絶えての省略……〃二、(一)

(14)解く……絶ゆに近似、結ぶに対する語…〃　一、

(15)継ぐ……(11)の結果、緒の修復……〃　一、

(16)又貫く……仝　右……〃　一、

（註）右の外、珠玉の緒の実体に関係なく、同音によってヲにかかる（服部高保・武田祐吉説）とするものがあり、甚だ持異である。この用例は万葉も後期の大伴家持の唯一回だけの使用例があるのみであり、それが恋愛発想でない歌に於ける使用であることは、他の唯一の恋愛発想歌でない歌に於ける使用が同じ家持であつたことと思ひ併せ、タマノヲの使用上既に持異である。従つて同音によるかかりを持異なるが故に否定することも出来ない。

なほタマノヲと語を熟さないものに於いても、珠玉の緒と関聯使用せられてゐる詞は、

（A）貫く(一例)、くくりよす(一例)、くくる(一例)、あふ(二例)、

（B）間あく(一例)

（C）絶ゆ(二例)、又貫く(一例)、替ふ(一例)、

の如くで前掲タマノヲの諸用例と同範囲のものである。

タマノヲのかかる詞或はタマノヲとの聯関で用ゐられて詞について見るに、用例の多いものに長しがある。蓋し緒本来の性質、従つてその詞の意味による接続とすべきであるが、用例の著しく多いのは、緒の性質から結果する珠の緒の断絶絶ゆに接続するものである。乱る、継ぐは「玉の緒の絶えて乱る」が示す如く、緒が絶えた結果として珠玉が乱れ、断絶した緒を継ぐ、のであるから、絶えてを前提とした接続である。さすれば、(10)弱み乱る、(11)絶ゆ、(12)絶えて乱る、(13)乱る、(15)継ぐ、(16)又貫く、はいづれも絶ゆへのかかりであるべく、その用例数は、下にかかる詞のある用例総べて二十四例（前項(二)(三)(四)にあげたもの。）中十二と正に半数に達してゐるのである。タマノヲが接続すべき「絶えて」を省略して、乱る、継ぐ、又貫く、へと意味を飛躍して接続してあることは、タマノヲによつて聯想せられるところが、絶える意味のものであることの著明であつた故であるとしなければならない。そして絶えて以外には、そのかかるべき詞を省略し、意味を飛躍しての接続が他に一例も存しないのであるから、タマノヲとだけ云つてその意味するところを職想了解せしめ得るのは、絶ゆといふ意味のものであつた、といふことになる。これが万葉集の時代に於ける最も常識的な意味であつた筈である。タマノヲバカリとだけで意味するところを明示表現せずにある当面の①②及び②*も、絶ゆる意のものであつたと解釈するのが妥当でなければならない。そして恋愛発想の歌に於いて絶ゆといへば、男女相逢ふことの絶える意であることは上掲の用例が明示してゐるところであるから、タマノヲバカリの歌に即していへば、次の如く結論し得ることになる。

①なかなかに（逢ふこと絶えたる）人とあらずは、桑子にもならましものを。玉の緒（の絶ゆる）ばかり（逢ふこと絶えて）。

②さ寝らくは、玉の緒（の絶ゆる）ばかり（絶えてあり）、恋ふら

くは、富士の高ねの鳴沢の（絶えざる）如（く絶えずあり）。
②*逢へらくは、玉の緒（の絶ゆるに）及（きてあれ）や、恋ふらくは、富士の高ねに降る雪（の絶えざる）如す（絶えずある）も。

五

タマノヲの意味・用法を以上の如くに解し、タマノヲバカリの歌に即して右の如くに解するにあたつて、①②及び②*各々の歌の意味上、表現上妥当な解釈であるか、どうか、なほ附説すべき問題がある。

まづ①については、タマノヲバカリは第五句に独立的に用ゐられてあり、従来の諸解いづれも第四句を承けるものとして解釈して来てゐる。万葉集に於けるこの歌との唯一の類似表現歌例、

なかなかに人とあらずは酒壺になりてしかも。酒にしみなむ
（巻三、三四三、旅人、讃酒歌）

の第五句が第四句を承けるものであるから、之に準じた解をなすことも所以なしとしないが、一体、万葉集に於ける「…ずは、…ましを」といふ表現形をとつた否定条件に対する仮想的希望を歌想とする歌は、一の類型表現として相当数を指摘し得るのである。右の大伴旅人の讃酒歌中のものは、むしろ個性的例外的な作例に属するものと見られる。

（註）讃酒歌十三首中、右の三四三に最も近い表現形のものに三三八があり、三四一及び三四七・三四八・三四九・三五〇も否定条件ではないが類似した表現形である。

旅人の讃酒歌が恋愛に関はりないのに対し、他の二〇首に余る類同歌は恋愛歌乃至は恋愛的発想の歌であり、しかも大多数が伝承歌或は民謡的性質の濃い歌で、「…恋ひつつあらずは、……ましを」といふ表現形をとつてゐる。

(1)かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐ねしまきて死なしものを
（巻二、八六磐姫皇后）
類同歌三〇(弓削皇子)、五四(金村)、八六四(憶良)、七三六(坂上郎女)
三八二、二六九三、二七六五、二九一三、四三四七(防人)

(2)なかなかに君に恋ひずは比良の浦のあまならましを玉藻かりつつ
（巻二、二七四三）
類同歌、二七四三或本歌、三二〇五、七三三(家持)

(3)白浪の来よする島の荒磯にもあらましものを恋ひつつあらずは
（巻二、二七三三）
類同歌、一六〇八、三三五四又歌、三三五八、三六四六、三六四六

(4)否定条件は崩れてゐるが近似形として
おくれてゐて恋ひば苦しも朝狩の君が子にもならましものを
（巻一四、三五六八、防人）
かくばかり恋しくあらば、まそ見ぬ日時なくあらましものを
（巻九、四三三、坂上郎女）
なかなかにいかにしりけむ吾が山に燃ゆる煙のよそに見ましを
（巻二三、三〇三三）

この場合の「恋ひつつある」とは、恋愛に充足の得られない事から結果する心的状態である。当面の「なかなかに人とあらずは」の人とあることを厭ふのも、同じく恋愛に充足の得られない故のものであらうから、「なかなかに（恋ひつつある）人とあらずは」の意のものである。前掲の類同歌群に於いても、「恋ひつつあらずは」が「恋ひつつある人とあらずは」の意味のものが約半数に及んでゐる。

吾妹子に恋ひつつ（ある人と）あらずは秋萩の咲きて散りねる花。
ならましを（二三〇）
かくばかり恋ひつつ（ある人と）あらずは朝にけに妹がふむらむ
土ならましを（二三九三）
外にゐて恋ひつつ（ある人と）あらずは君が家の池に住むとふ鴨。
にあらましを（七二六）

類同歌、五四四、八六四、三八二、七三三、二三三、四三四七　等

ところで「恋ひつつあらずは」は恋愛発想であることを明示して、恋愛の不充足状態を表現してゐるのに対し、「人とあらずは」は恋愛の不充足状態から結果する一段飛躍した心的状態を表現してゐるのである。従つて、「人とあらずはは」恋愛不充足以外を原因としても云ひ得る心的状態であることになり、それは讃酒歌が示してゐる。「人とあらずは」といふ表現形をとる場合、人の意味を恋愛不充足の状態のものとして了解し得るやうにしておかなければ恋愛発想歌としては不充分である。伊勢物語で「人とあらずは」が「恋に死なずは」におき替へられてゐることを参考すべきである。さて「玉の緒ばかり」が逢ふことの絶えてある恋愛不充足の意とすれば、この歌での人の意味が限定せられて、恋愛歌として完全し、了解の容易な歌となるのである。すなはち第五句「玉の緒ばかり」を第二句の人と対応するものと解して恋愛の意を明確にし得るのである。第五句と第二句とが対応関係にあると解することは、万葉歌に於いて第二句を第五句で繰返すものが最多で（沢瀉久孝「万葉集講話菜摘の巻」に詳説）、第五句、第二句が対応関係にあることの最も容易なものであつたことをいひ添へればよからう。

次に②及び②*の上句と下句との対称的表現の意味について附説する。上句のタマノヲを絶ゆる意とすれば、対称的な下句の富士に降る雪・鳴沢を絶えざる意と解さねばならない。富士山に降る雪が絶えないものとせられてゐたことは、

不尽のねに降り置く雪は六月のもちに消ぬればその夜ふりけり
（巻三、三二〇、高橋蟲麿歌集出）

とあり、「時じくぞ雪はふりける」（巻三、三一七、山部赤人）とあることによつて明示せられてゐる。鳴沢については他に所見がないが、火山活動の鳴動によつて鳴沢と命名せられてゐるものとすれば、鳴動の絶えざる意のものと解してよからう。これらについて先学の説がある。契沖は降雪について「降雪のごとく常に恋ふる心のやまぬなり」（代匠記初稿本）「絶エヌ意ナリ」（同精撰本）と解し、鳴沢についても「鳴沢ノ如トハナリ止ム期モナケレバ、玉ノ緒ノ短キニ対スルナリ」（同精撰本）と説いて絶えざる意に触れてゐる。契沖以降に類同の説のあることを知らないが、はやく仙覚の註釈に、鳴沢は「タカキコトニタトヘ、タエセヌコトニタトフル也」、玉の緒は「スクナキコトニタトフ、又ナカタユルコトニタトフ」とあつて、それぞれ両解を挙げて決定的ではないが、絶と不絶との正しく対称的な解を内包せしめてゐる。私の解は契沖、仙覚の古註に復帰し、対称的表現として意味の上でも対称的に解して徹底せしめたものに他ならない。

（昭和二十六年十一月稿、三十年一月改稿）

—— 大阪経済大学教授 ——